先史琉球
の
生業と交易２
・

琉球列島の
農耕社会形成過程の解明に向けた
実証的研究
―５～７世紀を中心に―

小畑　弘己・河名　俊男
岸本　義彦・黒住　耐二
甲元　真之・佐々木長市
佐藤　幸一・新里　亮人
杉井　　健・高宮　広土
樋泉　岳二・徳永　光一
中村　　愿・中村　友昭
中山　清美・西野　　望
松田順一郎

木下尚子（編集）

平成14～17年度
科学研究費補助金基盤研究(A)（2)研究成果報告書
研究課題番号　14201043

March 2006

熊本大学文学部

目次

第1章
研究の目的と概要

木下　尚子 …… 1

第2章
遺跡調査報告

第1節　ナガラ原東貝塚の概要　木下　尚子 …… 11
第2節　安良川遺跡の概要　新里　亮人 …… 17
第3節　マツノト遺跡2004の概要　中村　友昭 …… 22

第3章
遺跡の形成と環境—自然災害・砂丘形成・根成孔隙—

第1節　海岸地形と自然災害
—奄美大島笠利半島における考察—　河名　俊男 …… 31
第2節　マツノト遺跡の砂丘堆積物の分析　松田順一郎 …… 41
第3節　海岸砂丘白砂層の分層
—奄美大島マツノト遺跡における遺物包含状況と堆積学—　木下　尚子 …… 59
第4節　遺物包含層における現代イネ混入の検討（抄録）　木下　尚子 …… 67
第5節　ナガラ原東貝塚とマツノト遺跡における根成孔隙
佐々木長市・佐藤　幸一・徳永　光一 …… 75
付論　ナガラ原東貝塚の根成孔隙にかかわる土壌調査記録
木下　尚子 …… 83

第4章
生業と居住形態からみた地域性—奄美と沖縄

第1節　南島中部圏における植物食利用の復元の意義　高宮　広土 …… 89
第2節　脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄　樋泉　岳二 …… 101
第3節　貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活　黒住　耐二 …… 115
第4節　住居形態からみた琉球列島の地域性　杉井　健 …… 135

第5章
4～5世紀から9～10世紀の土器編年

第1節　沖縄諸島貝塚時代後期の尖底土器と平底土器
—遺跡における水平分布と垂直分布—　岸本　義彦 …… 153
第2節　奄美諸島の古墳時代併行期の土器　中村　友昭 …… 157
第3節　兼久式土器分類試論
—奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に—　中山　清美 …… 171
第4節　琉球列島出土土師器、須恵器の基礎的研究
—マツノト遺跡出土土師器の検討—　新里　亮人 …… 179

第6章
ヤコウガイの利用と交易

第1節　奄美諸島における6世紀から8世紀のヤコウガイ利用の実態
—マツノト遺跡出土のヤコウガイ分析を中心に—　西野　望 …… 189
第2節　ヤコウガイ交易の可能性
—6～8世紀の奄美大島3遺跡の分析—　木下　尚子 …… 201
付論　マツノト遺跡第1文化層、用見崎遺跡3層、安良川遺跡の先後関係
—ヤコウガイデータ分析のための基礎作業として—

第7章
総括

木下　尚子 …… 231
General overview　篠藤マリア（翻訳） …… 243
总结　劉　軍（翻訳） …… 259
총괄　金　姓旭（翻訳） …… 278
ABSTRACTS …… 303

研究の目的と概要

1．研究の目的と方針

（1）研究の目的

本研究は、先史時代における琉球列島の歴史的特性を、生業と交易に重点をおいて解明しようとするものである。熊本大学考古学研究室では、先史琉球の生業と交易と題する共同研究を1995年以降継続しており、今回の研究もその延長である。以下にこれまでの研究の概略をのべ、今回の目的を改めて示したい。

（2）研究の経緯1

本研究室では1995年奄美大島用見崎遺跡の調査において共同調査を開始し、1999年に科学研究費をえて沖縄県伊江島のナガラ原東貝塚を調査した（1999～2001年、科研費（A）（2）11410107)。おもな成果は以下のようであった（木下編2002)。

- 用見崎遺跡は7世紀を主体とする生活址であり、ナガラ原東貝塚は6世紀を主体とする生活址である。前者では多数のヤコウガイとともに開元通宝1枚を検出し、後者では食料残滓の貝層と貝符を検出した。
- ナガラ原東貝塚の包含層におけるしゃこがいの合弁状況から遺跡における同一時期面を確定し、これらに伴う2種類の土器（尖底土器と平底土器）が同時並存であることを示した。
- 遺構内土壌のウォーターフローテーションによって、ナガラ原東貝塚でイネとコムギを検出したが、同時期の奄美大島用見崎遺跡では、穀物は検出できなかった。伊江島例は、これまで琉球列島で知られるもっとも古い穀物出土例となった（高宮2003)。
- ナガラ原東貝塚の微小貝類による環境復元による限り、当時の伊江島には畑、水田ともに、存在した可能性は低いことを指摘した（黒住2003)。
- 奄美と沖縄では漁労文化に技術的な差のあることを指摘した（樋泉2003)。

このほかに沖縄諸島における農耕の開始時期（甲元2003)、狩猟採集経済の実態の分析（樋泉2003)、居住形態の変化の動向（杉井2003)、古琉球期の銭貨の状況（小畑2003)、滑石製石鍋の流通（新里2003)、ヤコウガイ交易（木下2003）についての論考がある。

6世紀は琉球・九州間の貝交易が継続していた時期である。討論の結果、伊江島の穀物は交易によって島にもたらされた可能性が高いこと、また奄美と沖縄間に生業面で差異が認められること、沖縄・九州間の貝交易が収束したあと、奄美を中心とするヤコウガイ交易の存在した可能性が提起された。

（3）研究の経過2

2002年から2005年の科学研究費による共同研究（本研究）である。前年までの研究成果を継承し、貝塚時代後期における穀物の存在を重視して、生業の研究テーマに農耕化の過程を加えた。また、沖縄と奄美地域の比較研究を進めるため、調査地を奄美大島に変更し、以下の三つのテーマを設定した。

①5～10世紀の琉球列島における穀物利用の実態を解明する

②5～10世紀の奄美と沖縄における先史文化を比較する

③6～8世紀のヤコウガイ交易の存在の検証作業をすすめる

2002年夏、メンバーの甲元真之氏の意見をいれ、確認のためにナガラ原東貝塚のイネ３個を^{14}Ｃ年代測定にかけた。その結果は３点ともに「現代」であった。詳細は本書第３章第５節に示したとおりである。

この結果は、共同研究を継続し始めたばかりのわたしたちにとって衝撃であった。検討の結果、包含層における炭化イネは、土中の植物根穴やその痕跡による直径２～３ｍｍ以下の空洞（根成孔隙という）を伝って包含層まで沈下した可能性が強くなった。発掘調査において、土層の状況や堆積環境に注意を払うべきだという考えから、調査にあたり以下の三つの視点を加えることにした。

①－1．ナガラ原東貝塚ならびに奄美の砂丘遺跡における根成孔隙の有無を確認する

①－2．砂丘の堆積について堆積学による検討を加える

①－3．サンゴ礁地形と遺跡形成について地理学による検討を加える

（４）本研究の方針

2002年、テーマを以下のように設定しなおし、共同研究を再出発させた。

①　自然科学的分析により文化層の堆積環境を復元する

②　５～10世紀の奄美と沖縄における先史文化を比較する

③　６～８世紀のヤコウガイ交易の存在の検証作業をすすめる

２．研究の組織、方法、経費

（１）研究組織

考古学班と自然科学班で組織した。

共同研究メンバーは以下のとおりである。（　　）内に参加年度、〔　　〕内に専門分野を示した。参加年度を記さないメンバーは４年間の参加を示す。

研究代表者	木下尚子	熊本大学・文学部	〔考古学〕
研究分担者	甲元眞之	熊本大学・文学部	〔考古学〕
	小畑弘己	熊本大学・文学部	〔考古学〕
	杉井　健	熊本大学・文学部	〔考古学〕
	黒住耐二	千葉県立博物館	〔貝類学〕
	高宮広土	札幌大学・文化学部（平成14・15・16年度）	〔人類学〕
研究協力者	樋泉岳二	早稲田大学・文学部	〔動物考古学〕
	岸本義彦	沖縄県教育庁・教育委員会	〔考古学〕
	中村　愿	沖縄県北谷町・教育委員会	〔考古学〕
	中山清美	鹿児島県笠利町・教育委員会	〔考古学〕
	新里亮人	鹿児島県伊仙町・教育委員会	〔考古学〕
	佐藤幸一	北里大学・獣医畜産学部	〔土壌学〕
	徳永光一	岩手大学（平成15年度）	〔土壌学〕
	佐々木長市	弘前大学・農学生命科学部（平成15・16年度）	〔土壌学〕
	西野　望	岡山県矢掛町・教育委員会（平成15・16・17年度）	〔考古学〕
	松田順一郎	東大阪市文化財協会（平成16・17年度）	〔堆積学〕
	中村友昭	熊本大学・文学部（平成16・17年度）	〔考古学〕
	河名俊男	琉球大学・教育学部（平成17年度）	〔地理学〕

（2）方法

本共同研究は、考古学と自然科学の共同作業を重視している。3年間は沖縄と奄美大島において発掘調査を実施し、現場で資料採取、意見交換を継続した。またこれをもとにした研究会を行なって年次成果をまとめた。最終年度はヤコウガイ計測調査を集中的におこなった。

（3）経費

本研究の経費は、以下のとおりである。

平成14年度	420万円
平成15年度	420万円
平成16年度	450万円
平成17年度	430万円
総　　計	1720万円

3．研究の経過

2002年度

・発掘調査（沖縄県伊江村　ナガラ原東貝塚第5次調査）

調査主体：熊本大学考古学研究室（担当：木下）

調査期間：2004年8月4～8月15日

現場統括者：檀佳克、杉井健

調査参加者：新里亮人（博士課程1年）、荒木隆宏（以下修士1年）、檀佳克、橋口剛士、宮本千恵子、江頭俊介（以下学部4年）、芝康次郎、上野平優紀（以下学部3年）、中里陽道、中田伸一、前田知聖、村上彩、望月大輔、森幸一郎、安元香名美、青山陽介（以下学部2年）、壱岐尾可奈子、沖謙介、神川めぐみ、児玉　幹、斎藤伸太郎、三宮慶太、末永浩平、高橋直人、八郷芙美、麓晃、前田真由子、松ケ野恵

・研究会1

と　き：2002年8月13日、8月14日

ところ：沖縄県伊江村阿良地区公民館

参加者：小畑弘己、岸本義彦、甲元眞之、黒住耐二、新里亮人、杉井健、高宮広土、樋泉岳二、中村愿、中山清美、木下尚子

議　題：

1）共同研究の概要説明（木下）

2）平成11年～13年度共同研究の成果と反省

3）平成13年～17年度共同研究原案の検討

・研究会2

と　き：2003年3月16日

ところ：熊本大学考古学研究室

参加者：岸本義彦、黒住耐二、高宮広土、樋泉岳二、中山清美、甲元眞之、小畑弘己、杉井健、檀佳克、木下尚子



写真1　ナガラ原東貝塚の発掘調査（2002年7月）

発表・報告など

1．2002年ナガラ原東貝塚第５次調査の成果報告

1）ナガラ原東貝塚第５次調査の概要」（檀）

2）調査の成果と問題点―^{14}Ｃ年代測定値をめぐって（木下）

2．2003年調査計画案の検討（木下）

・４月26日（土）～５月５日（日）　奄美大島用安良川遺跡

・ナガラ原東貝塚の土壌学的調査

3．テーマ（農耕の開始、土器編年、５～12世紀の琉球列島）にかんする意見交換

3）奄美／沖縄諸島における農耕のはじまり（高宮）

4）脊椎動物遺体からみた調査成果（樋泉）

5）貝類遺体から想定される沖縄諸島での『農耕』開始時期（黒住）

6）沖縄後期土器編年研究の現状と仮題（岸本）

7）赤木名グスク（中山）

8）脚台喪失過程への疑問（杉井）

9）琉球列島における新石器時代後期土器編年への提言（木下）

4．討論

・発掘調査報告書の作成

檀佳克編「Ⅰ　ナガラ原東貝塚５」が2004年３月に完成。（『考古学研究室報告』第38集、熊本大学文学部考古学研究室、pp．1～74）

2003年度

・発掘調査（奄美大島笠利町用　安良川（アラゴー）遺跡）

調査主体：鹿児島県笠利町教育委員会

調査協力：熊本大学考古学研究室

調査期間：2003年４月26日～５月10日

現場統括者：中山清美・新里亮人

笠利町による発掘調査参加者：新里亮人（博士課程２年、現場責任者）、橋口剛士（修士２年）、壱岐尾可奈子（以下学部３年）、沖謙介、神川めぐみ、児玉幹、三宮慶太、末永浩平、八郷芙美、麓晃、前田真由子、松ケ野恵、山下典子、金姓旭（以下修士１年）、芝康次郎、西嶋剛広

科研費研究による調査参加者：小畑弘己、岸本義彦、黒住耐二、甲元眞之、新里亮人、杉井健、高宮広土、樋泉岳二、中村愿、中山清美、木下尚子

・根成孔隙の調査（伊江島　ナガラ原東貝塚）

調査主体：熊本大学考古学研究室

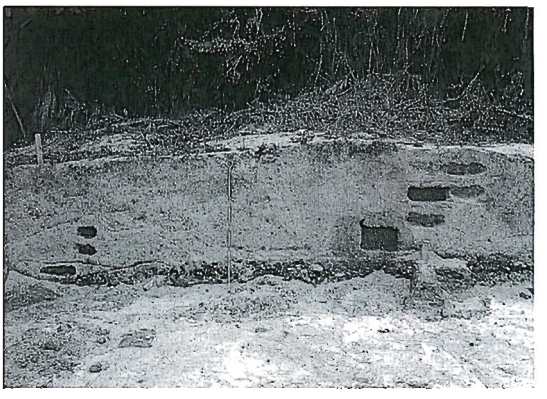


写真２　安良川遺跡の発掘調査
壁面で土壌サンプリングをおこなった



写真３　安良川遺跡調査参加者
（後列左から岸本、樋泉、新里、高宮、
前列左から黒住、中山の各氏）

調査期間：2003年11月19日、23日

調査参加者：徳永光一（元、岩手大学）、佐々木長市（弘前大学）、佐藤光一（北里大学）、木下尚子（熊本大学）、新里亮人（大学院社会文化科学研究科２年）

※　発掘調査報告書（笠利町教育委員会による）『安良川遺跡』笠利町文化財報告書第27集、2005年３月



写真４　ナガラ原東貝塚の土壌調査
（2003年11月23日、左から徳永、佐々木、佐藤の各氏）

2004年度

・発掘調査（奄美大島笠利町　マツノト遺跡）

調査主体：鹿児島県笠利町教育委員会

調査期間：2004年10月25日～10月31日

現場統括者：中村友昭・中山清美

笠利町による発掘調査参加者：中村友昭（以下課程１年）、南健太郎、森幸一郎、仙波靖子（以下学部３年）、西山絵里子、牧野幸子、清水恒志（以下学部２年）、高平愛子、津田勇希、石井龍太（東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻２年）

科研費研究による調査参加者：大坪志子、岸本義彦、黒住耐二、佐藤幸一、新里亮人、杉井　健、樋泉岳二、中村愿、中山清美、西野望、松田順一郎、木下尚子

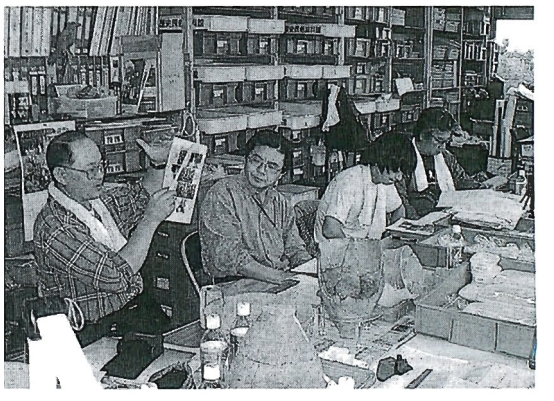


写真５　研究会の光景
（2004年10月30日、笠利町立歴史民俗資料館）

・研究会

と　き：2004年10月30日

ところ：鹿児島県笠利町立歴史民俗資料館

参加者：大坪志子、岸本義彦、黒住耐二、佐藤幸一、新里亮人、杉井健、樋泉岳二、中村愿、中山清美、西野望、松田順一郎、中村友昭、木下尚子



写真６　マツノト遺跡2004の調査光景
（Mトレンチを調査中の学生諸氏、左から清水恒志、牧野幸子、森幸一郎の各氏）

発表・報告など

１．自然科学班の研究発表

１）マツノト遺跡発掘調査の概要（中山、木下）

２）マツノト遺跡における砂丘の堆積（松田）

３）マツノト遺跡の環境復元（黒住、樋泉）

４）根成孔隙の調査結果（佐藤）

２．考古学班の研究発表―琉球列島の編年と兼久式土器（２：15～５：00）

１）琉球列島の貝塚時代後期編年と問題点（木下）

2）沖縄諸島の後期編年と問題点
（岸本・中村）
3）奄美諸島の編年と兼久式土器（中山）
4）笠利半島北部の兼久式期の遺跡（新里）
5）兼久式土器期の生業（樋泉・黒住）
3．討論

2005年度

- **ヤコウガイ調査1**

調査主体：熊本大学考古学研究室
調査期間：2005年4月29日～5月3日
調査場所：鹿児島県笠利町歴史民俗資料館
調査内容：マツノト遺跡、用見崎遺跡出土ヤコウガイの個体数確認および計測
参加者：木下尚子、新里亮人（鹿児島県伊仙町教育委員会）、西野望（岡山県矢掛町教育委員会）、石堂和博（南種子町教育委員会）、中村友昭（熊本大学修士課程2年）、高平愛（以下学部3年）、清水恒志
協力者：中山史尚、田代征也（以下鹿児島県立大島北高等学校生徒）、川見聖人、河野秀和、友野秀幸、森大志郎、中原一成（同校教諭）、

- **層序確認作業**

と　き：2005年9月28～29日
ところ：熊本大学文学部考古学研究室
参加者：松田順一郎、中村友昭、木下尚子
作業内容：マツノト遺跡調査時の層序について、考古学の図面と堆積学の記録を相互に確認し、意見交換をする。

- **研究会**

と　き：2005年11月3日（日）9：00～17：00
ところ：熊本大学文学部会議室
参加者：河名俊男、甲元眞之、岸本義彦、黒住耐二、佐藤幸一、新里亮人、樋泉岳二、中村愿、中山清美、松田順一郎、小畑弘己、杉井健、中村友昭、木下尚子
発表・報告など
1．今年の活動報告、報告書作成案の説明など（木下）
2．自然科学班の研究発表



写真7　マツノト遺跡2004調査参加者
（マツノト遺跡、右から中山、松田、黒住、樋泉、佐々木の各氏。左端木下）



写真8　マツノト遺跡出土ヤコウガイ調査光景
（笠利町立歴史民俗資料館、左から中山、高平、清水の各氏）



写真9　マツノト遺跡土器分類作業
（笠利町立歴史民俗資料館、右から中山、中村、新里の各氏）

奄美大島の海岸地形理解のために、琉球大学の河名俊男教授にとくに発表をお願いした。

1）マツノト遺跡の堆積について（松田）

2）根成孔隙の分析報告（佐藤）

3）琉球列島における過去数千年間の津波と台風の高波による人間生活へのインパクトの可能性の検討（河名）

4）用安良川遺跡・マツノト遺跡・用見崎遺跡・ナガラ原東貝塚の脊椎動物遺体群
（樋泉岳二）

5）用安良川遺跡・マツノト遺跡・用見崎遺跡・ナガラ原東貝塚の貝類遺体群
（黒住耐二）

6）マツノト遺跡の植物遺体（高宮広土　紙上参加）

3．考古学班の研究発表

1）沖縄諸島貝塚時代後期の尖底土器と平底土器―遺跡における水平分布と垂直分布について―（岸本義彦）

2）奄美諸島の兼久式土器（中山清美）

3）奄美諸島の古墳時代併行期の土器
（中村友昭）

4）奄美諸島出土のヤコウガイ分析
（西野望　紙上参加）

5）マツノト遺跡出土のヤコウガイ分析（木下尚子）

4．討論

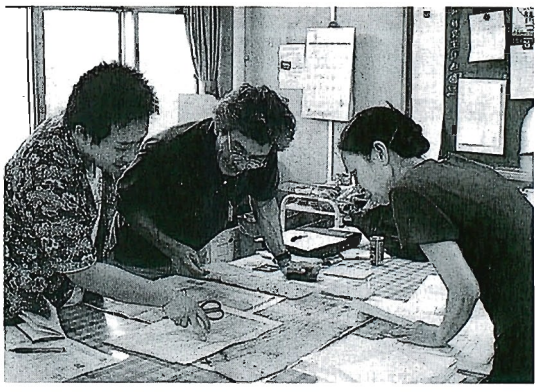


写真10　マツノト遺跡2004の層位図すりあわせ作業
（熊本大学考古学研究室、
左から中村氏、松田氏、木下）

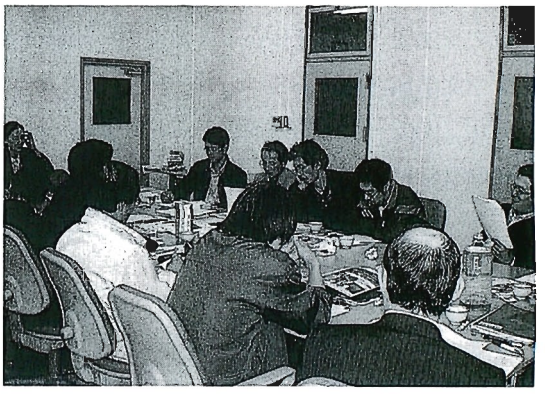


写真11　研究会の光景
（2005年11月３日、熊本大学文学部）

・ヤコウガイ調査２

調査主体：熊本大学考古学研究室

調査期間：2005年11月28日～12月１日

調査場所：熊本大学考古学研究室　考古学資料室

調査内容：用見崎遺跡出土タカラガイの個体数確認および計測

参加者：清水恒志（以下学部３年）、高平愛子、高椋浩史（学部２年）

・ヤコウガイ調査３

調査主体：熊本大学考古学研究室

調査期間：2005年12月２日～12月６日

調査場所：鹿児島県笠利町歴史民俗資料館

調査内容：安良川遺跡、宇宿小学校遺跡出土タカラガイの個体数確認および計測

参加者：木下尚子、清水恒志（以下学部３年）、高平愛子、高椋浩史（学部２年）

協力者：田代征也（以下鹿児島県立大島北高等学校生徒）、河野秀和、友野秀幸、中原一成（同校教諭）

（文献）

木下尚子2002『先史琉球の生業と交易』編著、平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書、熊本大学文学部

2002「貝交易と国家形成―9世紀から13世紀を対象に」『先史琉球の生業と交易』pp.117～144、熊本大学文学部

小畑弘己2002「出土銭貨からみた琉球列島と交易」『先史琉球の生業と交易』pp.145～161、熊本大学文学部

黒住耐二2002「貝類体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」『先史琉球の生業と交易』pp.67～86、熊本大学文学部

甲元真之2002「琉球列島の農耕のはじまり」『先史琉球の生業と交易』pp.25～34、熊本大学文学部

新里亮人2002「滑石製石鍋の基礎的研究－付　九州・沖縄における滑石製石鍋出土遺跡集成」pp.162～190、熊本大学文学部

杉井健2002「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易』pp.87～113、熊本大学文学部

高宮広土2002「植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり」『先史琉球の生業と交易』pp.35～46、熊本大学文学部

樋泉岳二2002「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易』pp.47～66、熊本大学文学部